

父にはお気に入りの話の一つございました。折にふれ、ひとに語り聞かせていたようで、

私がまだ幼かった頃、来客に話しているのを聞いた覚えがありますし、父の監督下で見習いを始めたときにも一度聞きました。さらに、私が初めての執事職を得て（オックスフォードシャー、オールショットにお住まいだったマガリッジご夫妻の、比較的ごちんまりしたお屋敷でした）、そのあと父に会いに帰ってきたときにも、同じ話を聞かされました。明らかに、父には大きな意味をもつ話だったのだと存じます。私どもと違い、議論や分析といったことに慣れていない世代の人でしたから、父はこのエピソードを繰り返して語ることとで自分の職業観を語り、それに批判的考察を加えていたのかもしれないとすれば、そこには父の考えに迫る重要な手がかりが含まれていることとなります。

父は実話だと言っておりました。雇主に従ってインドへ行き、その地の召使だけを使いながら、本国時代と変わらぬ水準を維持しつづけたという執事の話です。ある日の午後、晚餐の準備に手落ちがないことを確かめに食堂に行ったところ、なんと、食卓の下に虎が一頭寝そべっていたそうです。それを見つけた執事はそつと食堂から出て、注意深くドアを閉め、平然とした足取りで、主人が数人の客をもてなしている居間に向かいました。そして軽い咳払いで主人の注意を引き、こう耳打ちしたというのです。

「お騒がせしてまことに申し訳ございませんが、ご主人様、食堂に虎が一頭迷いこんだようでございます。十二番径の使用をご許可願えましょうか」

父の話によれば、数分後、主人と客の耳に三発の銃声が聞こえてきました。やがてお茶

を注ぎ足しに現われた執事に、主人は「不都合はないか」と尋ねたそうです。

「はい、ご主人様、なんの支障もございません」と、執事は答えました。「夕食はいつもの時刻でございます。そのときまでには、最近の出来事の痕跡もあらかた消えていると存じますので、どうぞ、ご心配なきように願います」

執事の最後の言葉、「そのときまでには、最近の出来事の痕跡もあらかた消えていると存じますので……」にくると、父は感嘆の面持ちでかぶりを振り、嬉しそうに笑いました。自分でその執事を知っているとも、知っている人を知っているとも言わず、ただ、話自体はほんとうのことだと念を押すだけでしたが、実話かどうかはこの際どうでもよいことです。重要なのは、そこに父の理想が語られていたということです。いま振り返ってみますと、父はなんとか自分も話の中のその執事になりたいものと願い、生涯、努力をつづけたに違いありません。そして、執事として円熟期に入った頃、その望みはかなえられたと思います。もちろん、父には食卓の下に虎に出会う機会はなかったでしょうが、私自身が知っていることや、父についてほかの方々からうかがったことを総合すると、私には、父とその尊敬してやまなかったインドの執事とが重なり合っただけで、父もまた、同様のエピソードをいくつももった人でした。

epi
1-1-1
-3-

日の名残り

カズオ・イシグロ

ハヤカワ
epi 文庫

760
+税
早川書房